

問題

「役割」について次の問いに答えなさい。

- (1) 「役割葛藤」について具体的に挙げながら説明しなさい。
- (2) 「役割」の形成について論じなさい。

解答のポイント

(1) については、「同一の個人が持つ複数の役割同士が矛盾・対立する要素を含んでいる」という定義を示しつつ、適切な具体例を示す必要がある。なお、厳密にいうと解答例で示したのは「役割間葛藤」（複数の役割の間での矛盾・対立による葛藤）であり、「役割内葛藤」（単一の役割が持つ各要素がはらむ矛盾・対立による葛藤）等も「役割葛藤」とされるが、過去の公務員試験では前者の意味で出題されているため、解答例では「役割間葛藤」のみ示しておいた。しかし、「役割内葛藤」で例を示してもかまわないだろう。

(2) について、「役割形成」であれば、シンボリック相互作用論の流れにある R. ターナーの用語であり、「受動的に社会的役割を採り入れるのではなく、行為者の主体的な選択・解釈を経て役割を形成・取得していく」という意味になる。しかし、問題文は『『役割』の形成』なので、広い意味で解答例を示しておいた。また、『『役割』の形成』であれば、「個人のパーソナリティの中に社会的役割が採り入れられ形成されていく」（＝個人の内面への役割形成）だけでなく、「社会構造として、役割関係が形成されていく」（＝客観的側面としての役割形成）という意味も含まれるため、解答例では触れていないが、その筋で書いても問題ないだろう。

なお、一般に、「論じなさい」という問いの場合は自分の考察を展開するのが普通だが、『『役割』の形成』に関する主張というのは想定しにくかったので、学説の説明に終始した。ただし、公務員試験対策としては役割理論の学説史は非常にマイナーであるため、把握している者はほとんどいないと思われる。それゆえ、論理的に不自然でなければ、学者名を出さずに役割の形成に関する一般的な考察を示すだけでも大丈夫だろう。

解答例

(1) 「役割」とは、ある地位に望ましいと期待され学習される個人の行動様式のことである。また「役割葛藤」とは、同一の個人が持つ複数の役割同士が矛盾・対立する要素を含んでいるために、当事者に心理的緊張が生じたり役割遂行に問題が生じたりする状態を指す。たとえば、家族集団と職場集団の両方のメンバーである人物は、各集団で役割が必要とされる時期が重なっている場合は、時に「仕事と家庭のどちらが大事か」という役割葛藤に直面することがある。学校教師において、自分が担任しているクラスの入学式の日と、別の学校に入学した自分の子どもの入学式の日が重なった場合、職業人としては勤務校の入学式に出席するという役割期待に応えなければならない一方で、家庭人としては子どもが入学した学校の入学式に出席するという役割期待に応えなければならない。一般に、役割は所属する社会集団との関連で割り当てられるものであるため、同一の人物が複数の社会集団に所属して、なおかつそれぞれの集団の規範・論理に齟齬がある場合は、その人物が担っている役割同士にも齟齬が生じる可能性は高い。

(2)「役割」の形成については、大別して2つの見解がある。1つはR. リントンからT. パーソンズに至る構造=機能主義の流れに代表される見解であり、もう1つはG. H. ミードからシンボリック相互作用論に至る流れに代表される見解である。

前者の場合、個人に先立って客観的に確立された社会体系が存在し、社会体系の中で特定の個人が占める位置を「地位」、その個人が社会体系のためにしなければならない権利と義務の体系を「役割」と捉える。この見解において、役割の形成とは、すでに制度化されている役割期待や社会規範を個人が学習していく過程となる。ただし、この見解では役割は所与のものとされることから、個人の主体性が捉えられなくなっているという批判もある。

一方、後者の場合、行為者に先立って役割の体系が存在しているのではなく、行為者の相互行為の中で主体的に役割関係が形成されると捉える。それゆえ、この見解における「役割」の形成とは、すでに制度化されている役割期待や社会規範を個人が学習していく過程ではなく、行為者の解釈を経て選択的に取得することで各個人の役割が形成されることを指す。

アメリカ社会学では、1950年代までは前者の見解の方が主流だった。しかし、これはあらかじめ定められた役割を遂行するためだけに生きているロボットのように人間と捉えているという批判もあり、1960年代に入ると後者の見解の勢いが増した。とはいえ、主体性を強調しすぎると役割関係の安定性・持続性が説明しにくくなるという欠点もあり、論争は続いている。

以上
(1,110字)